

夏休みと本

幼稚園の先生方やお母様方に是非読んで頂きたいと思う本に、三つの種類があります。その一つは、子どもたちが実際に読み、心から楽しんでいるものです。たとえば、藤子不二雄作『ドラえもん』シリーズ（小学館）ですが、ここ数年来、子どもたちの間のベスト・セラーの一つです。おとなが見ると荒唐無稽の意味もないものに思えるこのマンガシリーズが、どうして子どもたちに喜ばれるのでしょうか。

『ドラえもん』の楽しさは、おとなの限 定された時間や空間の約束を無視しているところにあります。ドラえもんは万能のボケツから、自由に空を飛べるヘリトンボをしたり、考えていることが皆反対になってしまふコベアへの笛をだしたり、どこへでものびていつて屋根の上にあがってしまったボールをとったり、どちらをしば

つてしまつたりするビービヨロープをと

りだしたりします。中でも時間を越えて未来にも過去にも自由に出入りできるタイム・マシンの存在は、子どもたちの夢です。おとなとは異なった子どもたちの時間や空間の考え方、人間の限りない創意工夫の才能を信じて、自由に変身し、宇宙を駆けめぐるファンタジーをとばすことは、子どもの世界ではじめてできることです。急速な発達の過程で、心身のバランスを失いかける時、遠い原始の世界の海底火山の爆発を考えることは、ちょうど無意識の奥底

のものやもやとした気分を発散させることに 第二の種類は、おとなが子どもに読ませたいと思うのです。たとえば、J・M・バリー作の『ピーター・パン』（岩波少年文庫）や、『ピーター・パンとウェンディ』（福音館書店）です。ピーター・パンのお話は、ただ子ども向きたからというのではなく、この気分に同調することができません。しか

し、このようなファンタジーの中に子ども成長する心がひそんでいることをもう一度考えて頂きたいと思います。テレビなどでも子どもたちが喜ぶ怪獣たちや、一連の空とぶ英雄たち、変身する主人公なども同様な意味を持つものといえましょう。たたばかばかりの子ども向きのマンガや番組とは思わず、もう一度、どんな所が子どもたちにアッピールするのか、考えてみたいと思います。



なく、先生方やお母様方にも、是非もう一度読んで頂きたいものと思います。もともとは鳥であつて、半分は人間の子で、半分は妖精たちの仲間のピーターは、子どもたちの憧れの的です。雄々しく、親切で、しかもいたずらっ気の沢山あるピーターは、男の子たちの理想であり、女の子たちの中の未来の相手のイメージでしょう。ウェンディはやさしく、かわいらしく、それでいてちょっぴり母親みたいな思いやりがある、女の子の理想であると同時に、男の子の心の奥底に夢の女性像を育てあげます。彼らは永遠の子どもたちなのです。私たちおとなもいつまでもピーターやウェンディのような永遠の子どもたちを忘れずに、心の中に持っていたいものと思います。



同様にジョージ・マクドナルド作『リリ



最後に、子どもたちと一緒に読む本ではなく、おとなが子どもと共に夢を育てていいくアダルト・ファンタジーをおすすめします。たとえば最近、世界中で若い人たちの間のベスト・セラーとなつた言語学の教授のJ・R・R・トールキン作『指輪物語』全六巻(評論社)です。トールキンの著作はその他にも、岩波や評論社から出ていますが、一口にいって、それはおとな的心の中に生きている子どもの世界をえがいたものといえましょう。この本をただ筋だけでなく、もっと凝つて読みたい方は、過去の文献や、言語の中にそれぞれの名前や言葉の源流を探ることができます。トールキンに関しては、沢山の参考文献や研究書があります。

ス』(月刊ベン社)、あるいは、デ・ラ・メア作『三四の高貴な猿』(図書刊行会)なども、おとなが読んで面白いものです。これら著作にててくる情景や特異な文章の持つ雰囲気、奇妙な造語、語呂合わせの楽しさなどは、子どものみが持つ世界とおとの現実の世界との合体ともいえます。いわゆる自閉的といわれる子どもたちの言動も、このような世界からもう一度見直してみるともできるのではないか。う。